

DLsite 体験版

『鮮やかな夏の初体験⑨～夏祭り！花火の音で互いの声は聞こえない…… 野外セックス編～』

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

夏祭り当日。

俺は T シャツに短パンという、いつも通りの格好で里桜の家へ向かった。夕方になっても蒸し暑く、歩くだけで肌に汗がにじむ。

家の前で電話をかけると、「すぐいく」と短い返事があった。ほどなくして玄関のドアが開く。

「お待たせ！」

出てきた里桜を見て、俺は思わず足を止めた。白地に淡い柄の浴衣。少し上げた髪からのぞく首筋まで、いつもとは違って見える。

「里桜、今年も浴衣、張り切ってるね。とても綺麗だよ」

「ふふっ、ありがと。孝史は相変わらず気合い入ってないねえ」

「地元の夏祭りだからね」

里桜は呆れたように笑い、俺の手を取った。指を絡めて歩き出すと、会場へ向かう人たちの声が少しずつ大きくなる。

「今日は何食べるの？」

「リンゴ飴は絶対！」

「また、あの鈍器を買うの？」

「鈍器って言わないでよ！」

里桜は笑いながら俺の手を引く。毎年、飴の部分を食べたあとのリンゴは俺のところに回ってくる。今年もきっと同じだろう。

会場に着くと、揚げ物の匂いと甘い香りが混ざり合い、一気に祭りの空気に包まれた。里桜は宣言通りリンゴ飴を買い、袋を開ける前に自分の頭へ軽く当ててみせる。

「あっ、確かにこれは鈍器だ」

「でしょ？」

二人で笑いながら屋台を回った。たこ焼き、牛串、焼きそば、かき氷。気づけば、両手の袋は食べ物でいっぱいになっていた。

「どこか座って食べようか」

ところが、会場のベンチはどこも埋まっている。花火を待つ人たちが、もう場所を取り始めているようだった。

「どうしよう、孝史？」

困った顔の里桜を見て、俺は昔よく遊んでいた場所を思い出した。

「少し遠いけど、花火が見えるところがあるよ」

「どこ？」

「着いてきて」

俺は里桜の手を引いて、人混みの外へ歩き出した。屋台の明かりが遠ざかるにつれ、祭りの喧騒も小さくなっていく。

「孝史、どこに行くの？」

「俺が昔、よく遊んでいた場所」

やがて、橋の下に着いた。橋の上には人の気配があるのに、陰になったこちら側は静かだ。川から吹く風が、火照った頬を撫でていく。

「ここだよ」

里桜は周囲を見回し、俺を振り返った。

「こんな場所、知ってたんだ。どうして今まで教えてくれなかったの？」

「里桜は、賑やかなところの方が好きだと思ってたから」

「……私に遠慮してたの？」

彼女は少しだけ頬を膨らませ、それからコンクリートの縁に腰を下ろした。俺も隣に座る。

「でも、いいね。誰もいないし、二人だけの特等席みたい」

遠くで、花火開始を告げるアナウンスが響く。

里桜が、そっと俺の手を握った。俺が握り返すと、彼女は何も言わずに肩を寄せてくる。

その瞬間、夜空に一発目の花火が上がった。

——体験版はここまで。続きは製品版でお楽しみください。